HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ミュージックビデオの聖地巡礼に関する研究 : SKE48「羽豆岬」を事例として
Author(s)	村木, 伊織
Citation	コンテンツツーリズム論叢 : Collected Treatises on Contents Tourism, 1, 104-109
Issue Date	2012-08-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51839
Type	departmental bulletin paper
File Information	CTCT001_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ミュージックビデオの聖地巡礼に関する研究
―ＳＫＥ４８「羽豆岬」を事例として―

村木伊織

Ⅰ　はじめに

アニメやマンガなどのロケ地を「聖地」と呼び、またそこを訪れることを「聖地巡礼（1）」という。このような行為や名称は近年ムーブメントとなっており、自治体なども注目している。

一方で「ご当地ソング」をはじめとした音楽関係の聖地巡礼は増淵（二〇一一）が言うように「スローなコンテンツツーリズム」、「ユーザー主体の「静かなる」聖地巡礼」となっており、アニメやマンガといったコンテンツと比較すると盛り上がりはあまり見られない。特に最近の音楽シーンはアイドルが中心となっており、アーティストが自発的に作ることの多い「ご当地ソング」が生まれにくい環境にある。

その中で近年生まれた「ご当地ソング」がＳＫＥ４８（2）の「羽豆岬」である。

ＳＫＥ４８は秋元康プロデュースのアイドルグループであり、同じく秋元康がプロデュースするＡＫＢ４８の姉妹グループである。ＡＫＢ４８と同じように拠点となる劇場を愛知県名古屋市に持つＳＫＥ４８であるが、「羽豆岬」以外にこの楽曲の舞台となった南知多町と深い関係性はなく、また作詞した秋元康もこの地域に縁があるわけでもない。

このことから他の「ご当地ソング」とは制作の背景が異なるものであると言える。また「羽豆岬」のミュージックビデオ（以下、ＭＶ）は実際に羽豆岬のある南知多町で撮影され、そのＭＶの映像を基にロケ地巡りをするファンが多いという点でも、通常の「ご当地ソング」聖地巡礼よりフィルムツーリズムなどに近い性質であると考えられる。

そこで本稿ではＳＫＥ４８「羽豆岬」の聖地巡礼行動に関してまとめ、考察をしていく。なお、本稿においてＳＫＥ４８の

曲名を指す場合は「羽豆岬」と表記し、地名を指す場合は羽豆岬と表記する。

2 「羽豆岬」を巡る旅行行動

2.1 「羽豆岬」と羽豆岬

バスの窓を開けた時　潮の匂いがして来た
師崎から向かってる　夏への一本道
強い日射しに誘われ　友達と集合したよ
ノースリーブや半袖で　白い肌を灼きたい
カメラを向けあったり　変なポーズをしたり
冗談と笑い声　その一瞬が輝いてる

羽豆岬の展望台　海は大きくて
私たちの未来みたい　どこまでも続く
羽豆岬の展望台　元気をもらえる
どんな夢もここから見つかる　この海原
希望の船たちよ

悲しいことやつらいこと　そうさ　誰だってあるよ
雨の日も曇りの日も　明日には晴れるさ
後から考えれば　きっとつまらないこと
ケンカして泣いたのは　そう　心から笑うため
羽豆岬の夕焼けは　涙が出るくらい
嫌なことはすべて忘れ　美しく沈む
羽豆岬の夕焼けは　やさしい背中さ
どんな今日もリセットするような　水平線
港に帰る船

羽豆岬の思い出は　瞼　閉じる度
私たちの胸の奥に　鮮やかに浮かぶ
羽豆岬の思い出は　青春そのもの
遠い夢をここから見ていた　港を出る
勇気の船たちよ

以上が「羽豆岬」の歌詞である。「羽豆岬」は二〇一〇年七月七日に発売されたＳＫＥ４８の三枚目のシングルである「ごめんね、SUMMER」の通常盤 type-B 及び劇場盤に収録されており、ＭＶは通常盤 type-B のＤＶＤに収録されている。

この楽曲を歌っているメンバーは大矢真那、中西優香、平田璃香子、平松可奈子（以上、撮影当時チームＳ所属）、内山命、小木曽汐莉、古川愛李、松本梨奈（以上、撮影当時チームＫⅡ所属）の八名である。「アンダーガールズＢ」名義となっているが、ファンやメンバーからは「チーム羽豆岬」と呼ばれてい

る。このうち内山命を除く七名は愛知県出身であるが、南知多町の出身であるというデータはなく、おそらくメンバーと地域との関連性はない。

羽豆岬のある南知多町は知多半島の南部に位置しており、夏には海水浴客が多く集まる。人口一九九四〇人、面積三八．二四㎢。

表は観光客数の推移であるが、二〇〇一年から二〇一一年の一〇年間で減少傾向にある。「羽豆岬」のリリース年である二〇一〇年を見ると前年からは微増しており、地区別で見ると、ロケ地となった内海が増加しているのがわかる。しかし同じくロケ地となった師崎の観光客数は減少しており、この数字だけで「羽豆岬」の影響を判断することはできない。

年＼地区	内海	山海	豊浜	師崎	篠島	日間賀島	計
	千人	千人	千人	千人	千人	千人	千人
2001年	1,290	309	962	1,258	284	310	4,410
2002年	1,161	312	979	1,238	284	296	4,270
2003年	1,040	225	995	1,121	251	272	3,904
2004年	1,093	233	993	1,166	254	288	4,027
2005年	941	222	982	1,192	245	272	3,854
2006年	1,025	226	965	1,170	236	258	3,880
2007年	1,024	209	917	1,168	233	277	3,828
2008年	939	215	1,010	1,200	236	287	3,887
2009年	797	202	917	1,201	233	285	3,635
2010年	1,059	195	857	1,189	226	284	3,810
2011年	894	175	821	1,089	207	253	3,439

表　地区別観光客の推移（『南知多の観光　平成24年度版』より引用）

また町の観光課に「羽豆岬」の舞台になったことによる影響を尋ねたところ「明確な影響は見られない」ということだった。

このことから地域側ではＳＫＥ４８ファンによる聖地巡礼をあまり認識できていないということがわかる。

そこで次は実際のファンの旅行行動を見てみる。

2．2　ＳＫＥ４８ファンの聖地巡礼

アニメやマンガの聖地巡礼における巡礼者の旅行行動の特徴[3]として「作品の背景からロケ地を探す」「絵馬や巡礼ノートなどでその地に自分が訪れた証拠を残す」や「ブログやSNSなどを通じて個人が情報発信を行う」といった行動が見られるが、これと同じ現象が本事例でも見られる。

このＭＶの詳細なロケ地に関しては公式な発表がないものの、ファン自身が見つけ出している。またＭＶのロケ地にもなった羽豆神社にはＳＫＥ４８ファンによる絵馬が多くかけられている。その内容は自身が一番好きなメンバーの成功を祈るものや、ＳＫＥ４８がグループとして飛躍することを願ったものがほとんどである。同じくロケ地となった民宿喜楽屋にはファンがグッズを置いていくという行動をとっている。ブログなどで巡礼の報告等を行っている巡礼者も見られる。

以上のように「羽豆岬」聖地巡礼とアニメやマンガの聖地巡

礼では、巡礼者の行動に似通ったものが見られるということがわかる。

また南知多町が愛知県にあることから、名古屋市栄にあるＳＫＥ４８劇場での公演を見る前後に立ち寄るファンや、握手会の前後に立ち寄るファンの行動がブログなどから見られる。

ここまでは「羽豆岬」に関するファンの旅行行動について見てきたが、次はアイドル自身の旅行行動について見ていく。

２．３　アイドルの旅行行動

次に挙げるアイドルの発言は、筆者が二〇一二年七月一四日にパシフィコ横浜で行われたＳＫＥ４８ 9th シングル「アイシテラブル！」個別握手会にてアイドルと握手した際に質問し、それに回答されたものである(4)。しかし会場は録音禁止であり、なるべく正確に内容を記録するため回答直後にメモを取ったものの、ニュアンス等に間違いがある可能性がある。そのためあくまで参考としてここに記載する。

質問の対象としたのは加藤るみ、木下有希子、中西優香、平松加奈子（以上、取材当時チームＳ所属）、犬塚あさな、内山命（以上、取材当時研究生所属）の六名である。対象者の選択に関しては、チーム羽豆岬のメンバーとそうでなかったメンバー、ＳＫＥ４８に所属した時期などに多少ばらつきを与えて、様々な背景を持つメンバーを抽出した(5)ものの、筆者の個人的な感情も少なからず入ってしまったことをご理解いただきたい。

主な質問事項としては「羽豆岬に行ったことがあるか」であるが、握手時間の関係上、平松加奈子、木下有希子の二名に関しては「羽豆神社の絵馬を見たことがあるか」という質問もし、内山命に関しては加えて「民宿喜楽屋にも行くか」という質問をした。

加藤るみ
「羽豆岬行ったことある。番組のロケで(6)。プライベートでは行ったことないけどいいとこですよね」
木下有希子
「プライベートでも行きますよ。そんなには行かないですけどたまに行きますよ。羽豆神社も行きますよ。絵馬？絵馬なんてありましたっけ？」
中西優香
「プライベートでは行ったことないけどまた行きたい！チーム羽豆岬のメンバーで羽豆岬ツアーとかやりたいねって話をしてる」
平松加奈子
「プライベートでも何回も行ったことありますよ。五回ぐらい。

神社も行くし。近くにおいしい海鮮丼のお店もあるし。羽豆神社の絵馬も見たことある。ＳＫＥのいっぱいだよね」

犬塚あさな

「行ったことないです。どんなところでしたか？」

内山命

「よく行きますよ。絵馬も書いたりとかして。書きましたよ、私。本物ですよ、あれ。喜楽屋さんも行ってます。ファンの方のグッズもありますね。今度一緒に行きましょう！」

以上が回答だった。傾向として「羽豆岬」を歌ったメンバーにとっては思い入れが強く、歌っていないメンバーにとってはそこまで強くないようだった。木下有希子に関しては何度も行っているようだが、純粋に観光として行っている側面が強いように感じた。

特に同じチームＳの平松可奈子が認識している絵馬を木下有希子が認識していないということは、羽豆岬に関する情報はメンバー内でも共有されていないということだろう。このことから羽豆岬に行くということはＳＫＥ４８のメンバーにとっても極めてプライベートな旅行であると考えられる。一方で中西優香の言うようなツアーが実現すれば、ＳＫＥ４８と羽豆岬の関係性はかなりオフィシャルなものへと近づくだろう。

３　終わりに

今回の研究からわかったことは、アニメやマンガのコンテンツツーリズムと比べて、ＭＶの聖地巡礼は非常にスローなコンテンツツーリズムであるということである。「ご当地ソング」のコンテンツツーリズムがスローであるということは増淵が指摘していたが、映像が加わったＭＶにおいて、またアイドルというジャンルにおいても同じような傾向が見られたというのは意外だった。特にアイドル業界は近年盛り上がりを見せているだけに、そこでこのような結果が出ているということはアイドル以外の音楽業界にとってはなおさらその傾向にあるのだろう。

今回の研究ではアニメやマンガの聖地巡礼との違いが生まれる原因まで掴むことが出来なかったため、引き続き研究が必要であると考えられる。特に今回アイドルファンとアニメ・マンガファンの聖地巡礼行動に共通点が見られたため、その詳細な分析をすることでコンテンツツーリズムにおける旅行行動の傾向が見えてくるのではないかと感じた。

■注

（1）作品のロケ地だけでなく作者に関連する土地も「聖地」と呼ばれる。アニメ聖地巡礼に関しては山村（二〇〇八）や岡本（二〇〇九）などに詳しい。またアイドルにおける「聖地」として、コンサートを行った会場や頻繁にライブなどを行う会場なども「聖地」と呼ばれる。ＳＫＥ４８の場合、定期的に公演を行っている名古屋市栄のサンシャイン栄が「聖地」と呼ばれ、一般的にはサンシャイン栄の方が「聖地」として認識されている。

（2）名古屋市栄を拠点とするアイドルグループで二〇〇八年に誕生した。チームＳ、チームＫⅡ、チームＥの三チームからなり、サンシャイン栄にてチームごとに公演を行っている。チームに所属していないメンバーは研究生として公演やチーム公演で欠員が出た場合の代役として出演している。

（3）アニメ聖地巡礼における旅行行動に関しては岡本（二〇〇九）に詳しい。

（4）ＳＫＥ４８に限らずＡＫＢ４８とその姉妹グループ（乃木坂４６も含む）の開催する握手会には大きく分けて全国握手会、個別握手会、地方握手会の三種類がある。ＣＤ一枚につき参加券一枚が付属されている。参加券一枚につき握手できる時間はばらつきがあるものの、ＳＫＥ４８の個別握手会の場合五秒程度だった。また個別握手会の場合、最大五枚まで同時に参加券を使用することが出来、その場合枚数に時間が比例することとなる。今回筆者が使用したのは加藤るみ二枚、木下有希子一二枚、中西優香二枚、平松可奈子一二枚、犬塚あさな二枚、内山命一二枚である。

（5）ＳＫＥ４８はメンバーオーディションを過去五回実施しており、各回で合格したメンバーを一期生、二期生というように呼称する。今回の対象者は中西優香と平松可奈子が一期生（ただし中西優香に関してはＡＫＢ４８からの移籍であり、オーディションは受けていない）、加藤るみと内山命が二期生、木下有希子が三期生、犬塚あさなが四期生である。犬塚あさなが加入したのは「羽豆岬」リリース後であり、その点でも羽豆岬に対する思い入れが薄いのかもしれない。

（6）ＣＳで放送されているＳＫＥ４８の冠番組「ＳＫＥ４８学園」のことだと思われる。

■参考文献

岡本健（二〇〇九）「アニメ聖地巡礼の誕生と展開」『メディアコンテンツとツーリズム』CATS 叢書第一号、三一 - 六二頁

増淵敏之（二〇一一）『物語を旅するひとびとⅡ　ご当地ソングの歩き方』彩流社

南知多町産業振興課（二〇一二）『南知多の観光　平成２４年度版』

山村高淑（二〇〇八）「アニメ聖地巡礼型まちづくりに見るツーリズムの現代意義と可能性」『メディアコンテンツとツーリズム』CATS 叢書第一号、一 - 二一頁